

梅谷さんの米俵

takohei727

梅谷さんは、いつも馬を荷車に引かせて米俵をはこんでいる。

私は、梅谷さんにこう尋ねた。

「どちらへ行くか？」

すると梅谷さんはニコニコしながらこう言った。

「御用達です。」

御用達とは、大層な用事で私は藁帽子をとり敬意を込めてこう言った。

「ご健勝でいってらっしゃいませ。」

毎年新嘗祭の前になると梅谷さんが通り、毎年のように幾年も経ったある日。一本の矢から火が迸り、戦争が始まった。剣戟の音が鳴り響き私は無我夢中で自分の家に逃げ隠れた。

ふと気づくと次の日になっていた。街には被害がなかったが、裏の森がなくなっていた。どうやら戦争は終わったようだが、街はお侍さんの死体にあふれていた。

街のはずれにあった一つの死体。うつぶせに倒れていた。

かわいそうに住人が巻きこまれて一人殺害されたようだ。

私は表へ起こすとそれは、変わり果てた梅谷さんだった。

米俵には何も入っていなかった。